

メンバー

大塚賢一 46才
福迫順一 38才
安田豊太郎 32才
小西雅美 30才

Mountaineering Ski

天候

晴れ

紀行文

大塚賢一
小西雅美

写真&編集
大塚賢一

Vol.4 2001. 4/8 氷ノ山流れ尾根

「山側に身体を持って行くな～、エッジを喰われて滑落するぞ～」と大きな私の声がビデオカメラ越しに流れ尾根にこだまする。

この流れ尾根は氷ノ山の究極の急斜面のコースで、滑降している山スキーヤーは私の師匠である加藤氏と辻川氏以外に今だかつて見たことがない。自分のエッジで小さな雪崩れを起こしてしまうほどの急斜面なのである。

今回のメンバーは私、福迫、安田、小西の4人パーティーである。

天候は2週間前と同じくドピーカン日和りで町では25度を超す夏日である、ここ氷ノ山山頂も10度を超す夏日？である。雲一つない青空の下には遠く大山も展望できる。残念ながら白山は拝めなかった。

雪量は2週間前よりは多少減ってはいるものの、まだまだ北壁斜面は雪がたっぷり付いている。しかし連日の好天気で緩みも激しく快適に滑るとは言い難かった。



雪尻越えて稜線へたどり着く

このコースはスキー引張りから始まり、稜線に取り付く2mの雪壁登攀、斜度50度を超す崖のようなところをスキーザック固定での上り下り、アイゼン装着で急斜面登攀、シール・クトー装着の山頂直下の登攀、急斜面のダイナミックな滑降・・・と山スキーのすべての要素が含まれている格好のトレーニングコースである。

この度のツアーは一部終始ビデオカメラに収めて、パソコンで編集するという初めての作業に取りかかった。自分で言うのもなんだが処女作にしてはいいものが出来上がったと思っている。この編集作業にあたって30GBのハードディスクを積み、ファイヤーワイヤー、USBポートを積み、難しい本を解読し、時間と闘いながらああでもないこうでもない、と頭をひねりながら仕上げました。

小西雅美の『氷ノ山触れ合い記』

『ズシッ〜ン』こんな感じ。

大塚ボスのザックより見た目はでっかい私の50Lザックを背負うと(単にパッキングが下手っぴってことですけど)腹筋がタテに圧縮された気が・・・『一步が絶対に重い!!・・・気がするう〜』

板をザック固定したときはほんとうに見た目も縮んでたんじゃないかしら?

ほぼ一ヶ月ぶりの山スキーレッスンはむちゃ新鮮だけど、感覚をすっかり忘れてました。歩くのも大変で、よれよれ。安田さんが予想以上にいいスピードでボスの真後ろを行くので私はどんどん後退してるイメージ。『さみし〜』、今までで一番小休止が有り難かったスタートでした。

最初は”板引っ張り”、このあと、初めての”板ザック固定”。初めてっていうのに、いきなり、雪のない林の中にボスが入っていくう〜。『ええ〜??なんでえ〜?雪の上じゃあないのお??』、かさの高いスキーブーツは、両足がせまい足場でぶつかるし、グリップ力はもちろんないし、頭の上では2本の板が好きな枝に引っ掛かってからまりたがるし、ザックは私がバランスを

ちょっと崩すたびに大袈裟に『ブウ〜ン』って揺さぶりをかけてくるし、大変。

ふだんトレッキングだと、スキップで『ランランッ』って浮かれちゃうようなところなのに、ちょっとかっこが違うだけでこんなにも登れないとはかなり衝撃。トレッキング一年生の私を思い出しました。『いつも初めてはこんなもんかあ〜』めげません。いつかはかっこよく登るのだ!登れるのだあ!



急登

林を脱出して、やっと山スキーらしく雪の上へ。ホッとしたのもつかの間、『あれ?前に進まない!』ってうーんとふんばって一步を踏み出そうとすると、福迫さんに「板っ、板っ!」ってつつこまれて、初めて気付きました。枝に板がひっかかってました。それから、何回あったか・・・『すすまな〜いい!』『板っ、板・・・』



流れ尾根大滑降

安田さんの好調振りにボスは大喜び。「やっさん、髪の毛切ってから、バッチリやあっ!!ええ男あっ!!」木倉さんからは『うらやましいぞ』って電話がゲレンデに届きましたねえ。天気は暑いぐらいの快晴で、空はきれいし、山は映えるし、雪はまぶしいし、今、『仮の別の世界』にでもいるような幻想を抱かせてくれました。空の流れと一緒にゆっくりとゆ

うっかりと時間が過ぎていってる感じでした。

頂上について、ビデオインタビューで私の第一声、「腹ペコー！」お昼を食べてから、今日の初滑り。

急な斜面を滑って、急な斜面を今度は斜滑降。

「びびんなよおー、思

いきってまっすぐこいっ！！」って何回言われたかなあ??

ゲレンデでは気にならない斜面も山では滑落しないように、絶対にこけない！って目標があるので、とつても緊張とプレッシャーがあるんです。一回は斜面を横に移動してるときに、ほんとに滑落してしまいました。とうとう。「安田さんのせいやあ～～！！」ってわざとに叫んでみましたが、安田さん、木倉さん、彰君、やっぱりトラバースって難しいですよ。(過去の歴代滑落者に私も堂々と仲間入り・・・)

そして、下山スタートは目が点にもなるほどの、すごいとこでした。この前の岸本君はその雪崖から、跳んだし、震える程のダイナミックな滑りを披露してましたが、私はそこからずり落ちただけ。もちょっとはうまく滑れるかな?って期待もしたんですけど、まぐれはなかったけど、ぜいたくな広々としたスペースを滑れるのは、私好みでかなり楽しくなってきたらさらにごきげんモード。

登った林の中を滑って下るのも楽しい。「あの木とあの木の間を通る！」って思ってるのに違う木の間を通過してしまうことの方が多いけど、けっこうこれが楽しいの。失敗もこけるのもご愛嬌。

「ええ～??こんな絶対にかかれへえんー!!」「絶対にだめです



流れ尾根の急斜面



ブナ林滑降

うー！」ってところもあったけど、ボスのゲキと福迫さんのコースどりのアドバイスに助けられました。

さあ、それから、まだ大変なところがありました。朝登った土の林道。今度はスキーブーツにアイゼンなしで、板を

かついで、下るんですが、それが登る以上に困難でした。福迫さんになんど、落ちていったか・・・。

だから、翌日福迫さんは身体痛かったんですよえ～～。いいかげん、ボスからの「大丈夫かあ??」「ピーーーーー!!」「ピーー！」って呼出し笛の入る間隔も短くなり、心配されてるう～とは思ってたけど、今の慎重さを減らすわけにはいかなかったんで、あくまで、スローでも慎重に下りました。

『3人とも、なんでもできすぎいい～～』『なんでできちゃうのお??』ってほんとにいろんなことがこなせるようになるのってとてもいいなって思ってしまう。カッコよい私はいつになったら、存在できるんやう??ってあまりの今日のドンくさが恥ずかしかったのは大きいけど、1日楽しすぎました。

朝の6時ぐらいから夕方の6時過ぎまで山に居ただけで、こんなにも長い時間を一瞬も退屈せず、ずっと興奮し続けていれたっていうすごい氷ノ山での山スキーデーでした。